

横浜市立大学学術情報センター

貴重書
月替わり展覧会リーフレット
(147)

2023年12月の作品は
「蝦夷國全圖」「北海道國郡全圖」
—蝦夷地の地図の歴史—

展示テーマ

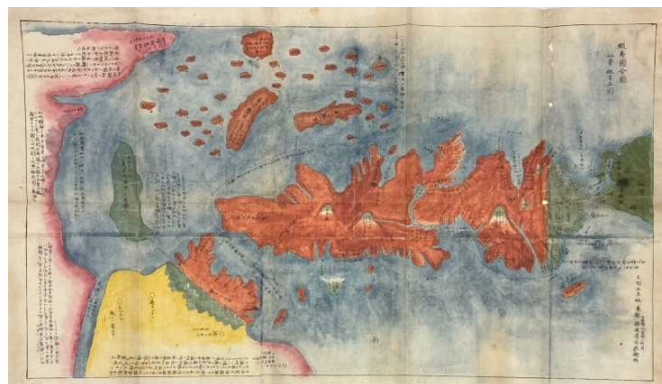
～歴史の短いからこそその蝦夷の地図の面白さ～

古地図は、現代の地図とは大きく異なり、地形や位置関係を表すのみでなく、古地図そのものに情報が付け加えられていることが多くある。例えば、世界地図には、各地の民族衣装や人々の様子が記されているものもある。また、測量技術や知識量の差から現在伝えられている事実と異なる記述が見られるところは、古地図の面白さであり、魅力であろう。

特に日本の中でも蝦夷地（北海道）は、日本の領域に正式に含まれるようになったのが遅かったため、短期間の間に地図が大きく変化している。松前藩の置かれた渡島半島周辺以外の地図は、幕末までかなり実際とは異なる描かれ方をしていた。幕府による蝦夷地の調査にはじまり、明治時代に入ると、新政府が蝦夷地を本格的に正式な日本の領域にしようと動き出したことなどを要因に、急速に現代の地図のような高い精度の地図が作られるようになった。

今回は、自分の出身地でもある北海道について新しい視点で見たいと思ひ、ふたつの古地図を比較することとした。

国際教養科学部 国際教養学科

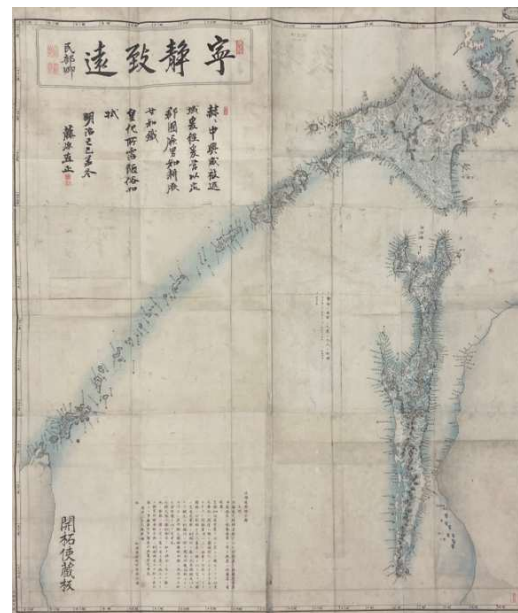


「蝦夷國全圖」
(1枚)

江戸時代、
天明5年(1785)
作者:林子平
(1738~1793)
縦54cm×横94cm

この作品は江戸時代後期の天明5年(1785)に、林子平によって作成されたものである。北海道図としては初めての単独刊行図である。

子平は、長崎に遊学し、海外事情も学び、海防に心を注いだ。著名な作品として挙げられるのは『三国通覧図説』『海国兵談』などがあり、この「蝦夷國全図」は『三国通覧図説』の図5枚セットのうちの1枚の写しとされる。



「北海道國郡全圖」(1枚)
明治時代、明治2年(1869)
作者:松浦武四郎
(1818~1888)

版元:開拓使蔵版
縦106cm×横91cm

この作品は明治2年(1869)に、松浦武四郎によって作成されたものである。武四郎は、幕末の探検家であり、日本全国を隅々まで歩き、蝦夷・樺太まで踏査した。北海道の名づけの親とも言われる。

彼の著作は、蝦夷に関するものが多く、『三航蝦夷日誌』『東西蝦夷山川地理取調日誌』『近世蝦夷人物誌』などがある。この作品では、ご覧のとおり、かなり現代の地図に近い地形、地名が記されており、大変細かくできている。

展示のみどころ

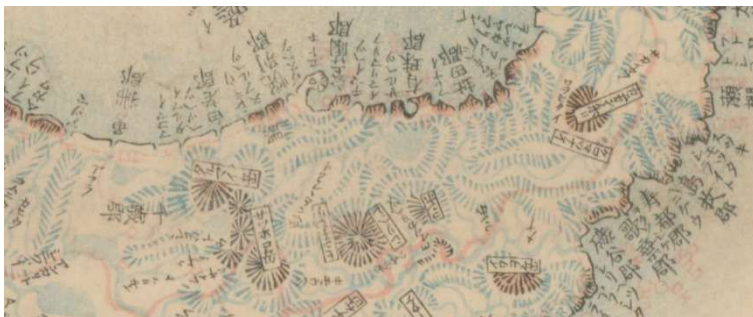
―地図の描かれ方と地名―

蝦夷地（北海道）の地図史において欠かせない林子平の「蝦夷國全図」と、蝦夷地開拓において重要な人物であった松浦武四郎の「北海道國郡全図」を比較して、地図の描かれ方、地名を見ていく。

まず、地図の描かれ方についてだ。表面の図ご覧のとおり、「北海道國郡全図」は上下が今の地図の真逆となっており、南を上、北を下にして描かれている。そして、「蝦夷國全圖」に関しても方角は今と全く違う描かれ方をしている。地形が似通っていないので分かりづらいかと思うが、「東が上、西が下、南が右、北が左」となっている。

そもそも「北が上、南が下」というのは、西洋から入ってきた地図の見方であり、方位表示については、江戸時代当時、特に決まった方式はなく、日本図などは現代図とは逆に南が上となったものが多かったようだ。ちなみに、当時は風水など気学の方位盤や陰陽学も南が上になっていたようだ。ただ、慣習的に江戸図は西、京都図は北、大阪図は東がそれぞれ上となっている場合もある。

続いて、地名についてだ。現在ではもう明らかではないが、かつては大変な数のアイヌ地名があったと言われる。溝のような小川にまでも名がついていたようだ。アイヌの人々は、もともと「地名」として蝦夷地各地に名をつけていたわけではなく、その場所の「地形」そのものを「大きい川」「冷たい川」などの意味を持つ言葉で呼んでいた。漁業や狩猟を中心とした生活を送っていた彼らにとっては、自然の地形の特徴が重要であったのだろう。



←
「北海道國郡全圖」
に描かれる、現在の
札幌市周辺の地名

この「地形」の名が、その地域を示す固有名詞である「地名」として使用されるようになった契機には、松浦武四郎の存在が挙げられる。武四郎は、アイヌの人々と共に蝦夷地を隅々まで探査した。その際、アイヌの人々から聞き取った「地形」の名前を、まさにその地点を表す一つの符号である「地名」の名前として受け取り、記録したことから、アイヌの人々にとってはその場所の「地形」を表していた言葉が、「地名」として機能するようになり、徐々に「地形」としての意味が意識されなくなっていった。そして、現在では「北海道の地名は多くがアイヌ語由来である」という事実だけが知られ、地名の意味の多くはわからなくなってしまった。

それでも、今もなお予測や推測を含むといえど、いくつかのアイヌ地名は意味とともに語り継がれ、残っている。アイヌの人々が統一国家的な社会を作らずに、部落（コタン）単位の小さな生活圏の中でほとんど自給自足に暮らしていたことや、地形からつけた名であるため地形を熟知している部落の人々によって呼ばれ続け、意味も深く根付き、大きく変化はせずに受け継がれてきたことが、理由と考えられるかもしれない。

<参考文献>

- ・横浜市立大学編(2013)．『横浜市立大学貴重資料集成 II 古地図』．横浜市立大学
- ・河治和香(2019)．「サッポロベッー松浦武四郎記念館」．松浦武四郎記念館．<https://takeshiro.net/wp-content/uploads/2018/12/takeshiro-40.pdf> (最終閲覧日：2022年8月1日)
- ・更科源蔵、吉田豊訳(2018)．『アイヌ人物誌：松浦武四郎原著『近世蝦夷人物誌』』．青土社
- ・山下和正(1996)．『江戸時代 古地図をめぐる』．NTT出版
- ・山田秀三(1982-1983)．『アイヌ語地名の研究―第一巻』．草風館．山田秀三著作集
- ・米家志乃布(2021)．『近世蝦夷地の地域情報』．法政大学出版局

あとがき ～貴重資料に触れて～

貴重書に触れたのが初めてで、とても新鮮で面白かったです。研究していく中で、次々と気になる点が出て来て、まだまだ調べたりないぐらいですがとても楽しくリーフレット作成を進めることができました。機会があれば、また作成してみたいし、今回調べ損ねたことや新たに興味を湧いたことも改めて調べてみたいと思います。久しぶりに学ぶことって楽しいのだということに気付かされる経験になりました。素敵な機会をありがとうございました。

※コレクションの閲覧は、作品保護のため、
展示品を除き申請が必要です。また利用は
学術研究目的に限らせていただいております。
※過去の展示はオンラインでも公開中です！



令和5年12月4日発行
令和元年度 日本文化論A 受講生 編集
236-0027 横浜市金沢区瀬戸 22-2
横浜市立大学 学術情報センター

第148回展示は令和6年1月上旬からを予定しています。